＜2017 年 12 月（通算 256 回）月例会報告＞

＊＊

運動部活動のいま

嶋崎雅規 （国際武道大学）

＊＊

【日　時】2017 年 12 月 19 日（金）19：05～21：15（終了後は「景宜軒」～23：30 ごろ）
【会　場】筑波大学附属高校 3F 会議室
【テーマ】運動部活動のいま
【演　者】嶋崎雅規（国際武道大学）

【参加者（会員・メンバー）10 名】
安藤裕一（(株）GMSS ヒューマンラボ）、岸卓巨（日本スポーツ振興センター）、斎藤芳（桜丘高校サッカー部顧問）、嶋崎雅規（国際武道大学）、白井久明（弁護士）、鈴木稔（オーシャンズジャパン株式会社）、竹中茂雄（東海道品川宿 FC）、中塚義実（筑波大学附属高校）、守屋俊英（世田谷区サッカー協会／高校サッカー部）、吉原尊男

【参加者（未会員）12 名】
池上功、氏家美優（茨城大学学部 4 年）、慶野順一（国際武道大学 OB）、小平健太郎（トレーニングコーチ）、岸弘之（西巣鴨中サッカー部外部指導員）、白井浩司（アスレティックトレーナー／フリーランスでパーソナルトレーナー）、関拓美（パーソナルトレーナー／コンディショニングコーチ）、長尾樹（アスレティックトレーナー／鍼灸師／㈱T.P.PLACE）、中西正紀（（株）古今東西社）、藤原明夫（県立千葉高校）、松並敬（都立豊島高校サッカー部外部指導員）、守屋佐栄（サッカーサポ／帰宅部）

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません（ご本人の了解が得られた範囲で公開しています）

【報告書作成者】久高怜南（国際武道大学 4 年）

目　次

Ⅰ．自己紹介と本日の流れ

1. 自己紹介
2. 本日の流れ

Ⅱ．運動部活動の歴史

1. 運動部活動とは
2. 部活動があるのは当たり前？
3. 戦前の部活動
4. 戦後の運動部活動

Ⅲ．運動部活動の現状と課題

1. 教師の部活問題
2. 運動部活動の現状と課題
3. 外部指導者、部活動指導員
4. 総合型地域スポーツクラブとの連携

Ⅳ．これからの運動部活動

1. ガイドラインの作成
2. これからの望ましい運動部活動

Ⅴ．ディスカッション

Ⅰ．自己紹介と本日の流れ

1. 自己紹介

改めまして、こんばんは、国際武道大学の嶋崎と申します。よろしくお願いいたします。今日はたくさんの方にお集まりいただいて、お話を伺うと、いろんな興味をもたれていて、私の話がどこまでうまくみなさんのプラスになるかなとちょっと不安な部分もありますが。まず私の経歴からちょっとだけお話をさせていただきたいと思います。私は 1962 年、東京都の調布市に生まれまして、小さい頃から野球ばかりやっていました。ところが、野球はまったくセンスがなかったので中 3 から当時人数が少なかったラグビー部に移りました。私は中高一貫の私立の学校にいたので中学生、高校生と一緒に部活をやっていたのです。中 3 からラグビー部に移って、高校ではキャプテンをやらせてもらいました。ラグビーで進学するのではなく、私は大学は早稲田大学の第一文学部に進学し、日本文学科を卒業しています。学生時代は万葉集や古事記などを研究しているという学生で、その傍らラグビーのいわゆるクラブチームに入ってラグビーの活動を続けていました。日本文学科で真っ黒に日焼けして、ごつい兄ちゃんは浮いていましたけれども。そして 85 年の卒業と同時に、帝京高校というところに非常勤講師として採用され、86 年から専任教員として勤務しました。そこでラグビー部を自分で作りまして、そこから 29 年間、ラグビーの指導をしてきました。その中で、多くの先生方と知り合うことができ、高体連などの活動にもたくさん参加させていただきました。私の転機になったのは、2000 年から 2 年間、筑波大学の大学院に通いまして、体育経営学というものを学んだことです。私が、なぜ大学院に行ったのかというと、部活のあり方に疑問を感じたからです。私がいた帝京高校は、野球部、サッカー部、女子柔道、男子バスケットなどにたくさんの選手をスカウトして、ものすごい練習して、全国に出て名を上げて、学校の名前が上がる、私の勤めたときの帝京高校の偏差値は 40 代でしたが、私がいる間にそれが 60 になりました。というのはすべて、甲子園効果とか、そういうことだと思います。そういうところにいましたので、「部活ってなんか違うんじゃないか」という疑問をもっていたのです。自分も最初は、何も知りませんから野球部の先生やサッカー部の先生がやっているのをまねして、それこそこんなこともしました。だけどそれは間違っているなと思って、私は理論的な背景が全くなかったので、それをちゃんと学ぼうと思って大学院に 2 年間通いました。そこで学んだことが、ベースになって、その後高体連の研究部というところで活動させていただいたり、学会で色々な活動をさせていただいて発言などさせていただいているわけです。そして、3 年前から国際武道大学で採用していただいて、今、保健体育の教員を目指す大学生に授業をしています。やはり自分としては、現場の中で疑問をもってそれを解決するために大学院に行った。そしてそこから、当時あまり行われていなかった運動部活動の研究をやってきたというのが自分の中での強みなのかなというふうに思っています。

2. 本日の流れ

そこで今日の話ですが、前半は、最初まず簡単に運動部活動の歴史について、まあ大学生に講義するみたいで申し訳ないのですが、簡単に触れさせていただきたいと思います。それから次に、いわゆるブラック部活動といわれる、部活動の問題ですね、そのあたりについて色々とお話をさせていただいて、その解決策としてでてきた部活動指導員というもの、それについても皆さんのご意見をいただければというふうに思っています。

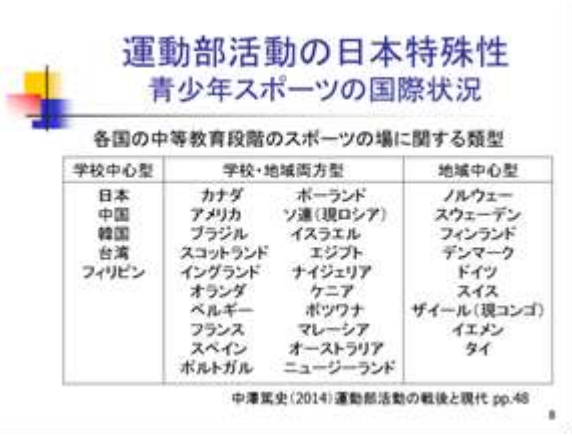
Ⅱ．運動部活動の歴史

1．運動部活動とは

まず最初に、「部活って何なんでしょう？」学校に部活があるのって僕らにとっては当たり前です。そして生徒は授業よりも、部活を楽しみにしていたり、勉強そっちのけで部活にのめりこんだり、卒業しても部活の思い出を大切にしていたり、激しい練習でやめたいと思ったり、これ全部自分も当てはまります。私は高校を卒業して 35 年ぐらいになるのですが、いまだにラグビー部の仲間と夏と暮れに年 2 回飲み会をやっています。一方、学校の先生にも、部活動の顧問になるために教員免許を取得して部活に生きがいを感じて熱血に指導するという人もいます。国際武道大学で入試の面接をしていると、多くの生徒が保健体育の教員になりたい理由の一つに「部活動の顧問をやりたい」、「サッカー部を教えたいです」などと言っています。しかしその一方では、好きでもない、興味のない運動部活動の顧問を任されて、負担に思って悩んでいる先生というのもいるわけです。それが SNS を通じて、発信されていって、今のブラック部活動の問題が出てきたわけです。代表的なのは、この「まゆこさんのブログ」というものですが、結構面白いです。私も時々見ていますが、ぜひ検索してみてください。こういう人たちもいるんだということです。

部活を題材としたドラマや漫画にもいろいろなものがあります。大学生にはぜんぜん受けないですが、みなさんには受けると思います。「われら青春」、誰も知りませんね。「スクールウォーズ」を大学生はほとんど知りません。もちろん「アタックナンバーワン」なんて、誰も知らないし、「ドカベン」も怪しいです。かろうじて、「キャプテン翼」だとサッカーの子は「あ、それそれ」という感じで、「タッチ」は結構、やっぱり一般的なのかなとか。そしてやはりメジャーなのは「スラムダンク」、そして最近では「ルーキーズ」などあたりだと大学生も「おー」となるわけですね。私はまさにスクールウォーズ世代で、自分が高校 3 年のときに山口先生の伏見工業が日本一になりました。ということで、今日は、みなさんにとっては懐かしいと思われるビデオを持ってきましたんの、ちょっとだけ見てもらおうと思います。

２．部活動があるのは当たり前？



学校中心型	学校・地域両方型		地域中心型
日本	カナダ	ポーランド	ノルウェー
中国	アメリカ	ソ連（現ロシア）	スウェーデン
韓国	ブラジル	イスラエル	フィンランド
台湾	スコットランド	エジプト	デンマーク
フィリピン	イングランド	ナイジェリア	ドイツ
	オランダ	ケニア	スイス
	ベルギー	ボツワナ	ザイール（現コンゴ）
	フランス	マレーシア	イエメン
	スペイン	オーストラリア	タイ
	ポルトガル	ニュージーランド	

ここまで見てきまして我々がいかに部活どっぷりの人間かということをみなさんが認識していただくとありがたいです。この日本の状況というのは実は世界的に見ると当たり前じゃないのです。学校で、こんなに盛んに部活が行われているというのは、全く当たり前ではないのです。学校を中心に青少年スポーツが行われているのはアジアの数少ない国だけなのです。例えばドイツなどでは、部活などというものは存在しないと聞いています。多くの国では、部活もあるけれども、地域のクラブが中心となってスポーツが行われているというのが現状のようです。この中には中国の部活動をご存知の方とか、先ほどの氏家さんは韓国に留学されていて、韓国の部活動事情なんていうのもあると思いますので、その辺も後ほど伺えたらというふうに思っております。それから、これは日本とアメリカとイギリスを早稲田の中澤先生が比較されたものです。日本ではほぼ全ての学校にいろいろな部活があって、大体高校生の 50%くらい、中学生の 70%くらいが活発に活動していて、全国大会もあって、先生が教えていて、というような教育活動として部活

動が行われています。しかし、例えばアメリカでは、トライアウト制といって少数の選ばれた人間だけがシーズン制で行う。全国大会などないし、教えているのも先生とは限らずプロフェッショナルのコーチが教えていたりと、競技力向上の活動である。イギリスでは、いろいろな部活があるけれども、入っている人は 50%くらいだし、活動もあまり活発ではない。どちらかというとレクリエーション活動の延長のような感じだというふうに言われています。これが諸外国の状況です。

3. 戦前の運動部活動

日本の部活動というのが、いったいどういうところから起こってきているかというと、やはりどうしても嘉納治五郎が出てきます。嘉納治五郎先生は、1915 年、東京高等師範学校内に体育科を開設したり、学校教育の中で課外活動として誰もが学校でスポーツを行えるシステムを構築した。そして、高等師範で学んだ人たちは、後に教員となって全国に散っていって、このシステムが全国に広まっていった。というようなことで、部活が広まっていくわけです。嘉納校長は、運動部を統括する運動会を 1896 年に設立、1901 年には校友会に改組して学生のスポーツ活動を推進したとあります。そして、最終的に初期の頃の運動部として柔道部、撃剣部、弓技部、器械体操部、相撲部、ローンテニス部、フートボール部これはサッカー部ですね、ベースボール部、自転車部、ボート部、徒歩部とは陸上部でしょうね、遊泳部、卓球部、ラ式フートボール部これはラグビー部です、このようなものがあったと言われています。戦前の部活動というのは、いわゆる高等教育機関を中心に行われていました。1886 年には帝国大学運動会が設立され、その後、東京商業学校、慶應義塾、東京師範、東京専門学校、京都帝国大学などに次々と作られていくわけです。これは、京大と東大の陸上の対抗戦の写真です。100m、砲丸、800mと書いてあります。そのような写真が残っております。

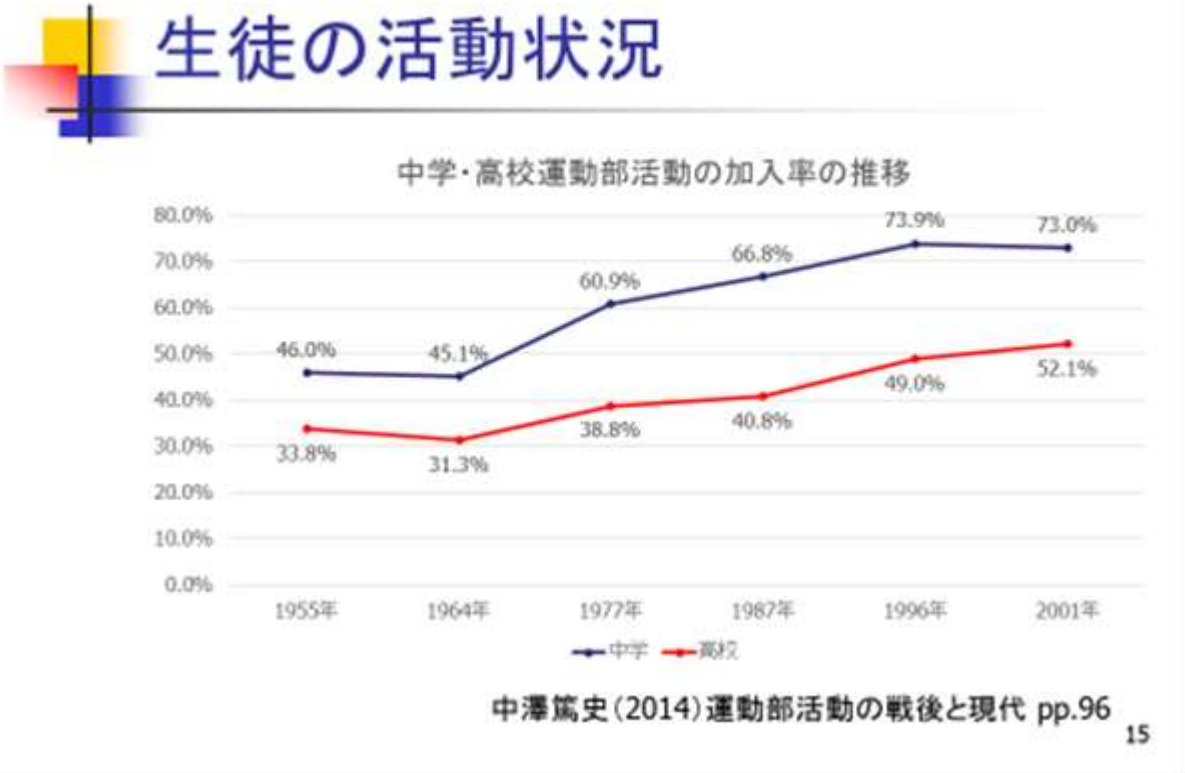
戦前の運動部活動ですが、明治後半からは旧制中学にも校友会が設立、整備されていきます。これが現在の中学、高校の運動部の前身です。で、1915 年には、全国中等野球優勝大会、いわゆる夏の甲子園が開催されるようになり、24 年には全国選抜中等学校野球大会、春の選抜が開催されるようになりました。そして 1918 年には、日本フートボール大会、アッソシエーション式とラグビー式が始まっていきます。当初、サッカーとラグビーの選手権は一緒にやっていたのです。しかし、実際に活動していた生徒が今のように多かったわけでは全くありません。というのは、中等教育機関、旧制中学に進学する進学率そのものが低かったので、それほど多くの生徒が、部活をやっていたということではないわけです。

（京都大学の HP より）

4. 戦後の運動部活動

戦後の活動状況を見てもらうと、こんな感じです。青が中学校、赤が高校です。1955 年には、だいたい中学が 46%、高校で 33.8%、それがだんだん上がってきてですね、2001 年には、中学が 73%、高校が 52.1%というような数字になっています。男女別に見たのがこちらです。やはり男子のほうが高いということがわかるわけです。これは男子ですね。これが女子ですね。これが中学で、こちらが高校でどちらも

男子のほうが高い、特に高校生の女子はかなり加入率は低い。現在は 40%くらいにはなっていますが、50 年代、60 年代は 20%前後というようなことだったようです。



戦後の部活動の歴史をざっくりとお話をさせていただきますと、部活の目指すところというものは、時代によってガラッと変わっていきます。まず、終戦直後から 50 年代の前半というのは、運動部活動によって民主主義的な教育をしよう、自由と自治を強調する運動部活動で民主主義を教えようということで、部活動は展開をされていきます。細かいところは割愛させていただきますけども、45 年の「新日本の教育方針」、46 年の「新教育指針」などで「課外活動の重視」とありますが、これは課外活動を通して民主主義を教えるという発想の元に行っているわけです。47 年の「学校体育指導要領」という、今でいう学習指導要領です、それには「学徒の個性を重んじて自主的活動を強調したこと」、「スポーツを重視して体育の社会性を強調したこと」、「課外体育を重視したこと」、「教職員はつとめて課外活動に参加し管理と指導に当たること」が記されています。運動部活動を人間形成の手段として活用するために、学校の教師とのかかわりが必要だと、もうこの時代から言われてきているわけです。

これがちょっと変わっていくのが、東京オリンピックが決まってからです。なにしろやっぱりメダルを取らないといけないと、競技力向上が一番のターゲットになってきました。59 年、60 年の保体審答申では、「スポーツ技術の水準向上」とか「体育の増強」というのが叫ばれるようになっています。運動部活動の中で競技力を向上していこうというような発想に変わっていくのです。しかしこれは、選手中心主義、一部のエリートのための部活動なんておかしいじゃないか、学校の教育活動としてそういうやり方はおかしいだろ、という批判も一方で受けていくわけです。

そして 70 年代です。必修のクラブ活動、ありませんでしたか？　私たちの時代はありました。私が教員になった時もまだやっていました。クラブ活動もスポーツ活動も自主的な活動を通じて教育的効果を得ようということです。これが 69 年、70 年の学習指導要領の改訂で出てくるわけです。一つには、スポーツを大衆化させるために、これに学校と教師が関わるようにということが求められるわけです。これは必修ですから、教育課程内です。クラブ活動は、教師が必ずやらなければいけない活動の一つにここでなるわけです。そして一方の運動部活動は、教育課程の一部ではないのですが、学校教育活動の一部、このクラブ活動の延長として教師のかかわりが求められ、教師の負担は増大していくということになるわけです。そうした一方で、これは社会体育化しようという動きも出てきます。71 年には「課外クラブ育成会」というのが東京都杉並区阿佐ヶ谷中学にできたり、72 年には兵庫県の明石市で「クラブ振興会」というのができたり、熊本県では県全域で大規模に社会体育化をしたりなど。しかし、これは失敗に終わります。理由は何だったかというと学校安全災害給付制度というものです。学校の教育活動で生徒が怪我をした場合、事故にあった場合には、当時、学校安全会と言われていた、今で言う日本スポーツ振興センターですが、ここの災害給付によって全部治療費等はカバーされるシステムになっていました。ところが、これを社会体育化してしまうと、この適用外になるわけです。ということで、その時の責任問題はどうするんだという話になるのです。生徒を外に出して、スポーツ活動をさせて怪我をしたときの責任はどうするのだという話になって、やはり学校の中で教師が指導する部活動に戻りなさいということで、戻っていってしまうわけです。

89 年には学習指導要領の改訂が行われまして、「部活動代替措置」がとられるようになります。必修クラブ活動は教育課程内ですから時間割の中にあります。けれど運動部活動に入っている人は、その必修クラブを履修しなくても必修クラブの単位を出していいということが学習指導要領で言われるわけです。そうすると、必修クラブを時間割上からなくして、その時間を英語の時間にしたり、数学の時間にしたりすることができるようになるのです。学校はこぞってそれをやるわけです。そのかわり、必修クラブの単位をつけなければなりませんから、そのために部活に全員入れと、全員加入制にするわけです。みんな部活をやっているから、この時間は時間割の中から省くことができるわけです。そういうことで部活動代替措置のおかげで、埼玉県では 98.8%の中学校が全員加入にするわけです。そして部活動に入っているから必修クラブの単位をそこで認めるということになるのです。これによって、教師の負担はさらに増大をしていきます。89 年ですから私はこのときすでに教員ですたが、どういうことが起こったかというと、まず時間割から必修クラブがなくなるわけです。そうすると部活をやっている生徒はそれで単位を取れるけれど、部活に入っていない生徒は単位を取れない。そこで彼らを全員、冬休みにスキー教室に連れて行く。そこで部活をやったことにするということをしていました、これが大変なんです。だってスキーなんかやりたくもないのに無理やり連れて行かれるわけですから。まして泊りじゃないですか、そりゃまぁ悪さしますよ。これははっきり言ってたいへんでした。こうして教師の負担はさらに増大をしていきます。そして全員加入になると、一方で、これは非行防止のため、生活指導の手段として部活が使われているようになっていきます。

どのあたりから外部指導者というのが出てくるか、外部化の話が出てくるかというと、89 年の保体審答申の「特色ある運動部活動の促進」という項目の中で、外部指導者の導入が出てきます。それから 97 年の保体審答申では、「地域社会にゆだねることは適切かつ可能なものはゆだねていくことも必要である」という文言が出てきます。そして 98、99 年には、あの必修クラブの活動は廃止になります。そうすると、部活動を公務とみなす根拠は失われます。今まではそれが単位になっていたから先生が指導するという、

公務とする根拠があったのですが、必修クラブがなくなりましたから、部活は自由参加で、これが単位になるわけではない。そうするとこれを公務とみなす根拠が失われてしまうという、運動部活動は宙ぶらりんの状態になるわけです。この頃から、部活動の指導や運営を外部化していこうなんていう動きが出てきます。そして次が、「開かれた学校」とか、最近でいうと「チーム学校」というものです。いわゆる生涯スポーツ論とか子どもの権利保障とか教師の負担、生きる力の育成などというところから学校運動部活動は多様化しましょう、外部化していきましょうとなる。地域住民を指導者として活用する「学社連携」とか、地域社会にスポーツクラブを作ってそこにゆだねる「学社融合」などという議論です。特に 2000 年のスポーツ振興基本計画では総合型地域スポーツクラブが出てきます。これを町に作って、部活動をゆだねていこうというような流れも出てくるわけです。先ほど先生が部活をやる根拠がなくなったと言いましたが、東京都教育委員会は 2006 年に都立学校の部活動を教育課程内に含めるように制度変更して、手当を出す代わりにちゃんと部活は先生の仕事ということしました。それから、2008 年、2009 年の学習指導要領の改訂では、こんな文言が出ています。「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること」、教育課程との関連が図られる、微妙なんですね。教育課程内ではないけど、ちゃんと関連してやりなさい、一環としてやりなさい、これも暗に先生がやりなさいというように言っていることに近いと理解をしています。それから、最近の話題としては 2015 年度ならですね、大阪市教育委員会は一部の中学校の部活動を民間事業者に委託するというようなことが行われています。これはざっくりですけども、戦後の運動部活動の流れを簡単にお話させていただきました。

では現在、部活動はどうなっているのかというと、これが現在の学習指導要領です。「総則」に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育活動の一環として教育課程との関連が図られるよう留意すること」いう文言があります。高等学校の学指導要領でも、文言は全く同じです。私がよく使うのは、97 年に出された保健体育審議会の答申です。この中に、運動部活動はこう定義されています。ちょっと長いですが、「運動部活動は学校教育活動の一環として行われ、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい豊かな学校生活を経験する活動である。この運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るだけでなく、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成するとともに、仲間や教師(顧問)との密接な触れ合い

中学校学習指導要領（平成20年3月告示）
第1章　総則
第4　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

（13）生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育活動の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。

27

そもそも学校運動部活動とは、

運動部活動は、学校教育活動の一環として行われ、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい豊かな学校生活を経験する活動である。この運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ能力や態度を育て、体力の向上や健康の増進を図るだけでなく、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成するとともに、仲間や教師(顧問)との密接な触れ合いの場として大きな意義を有するものである。

文部省（1997）「生涯にわたる健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」（保健体育審議会答申）

29

の場として大きな意義を有するものである。」と書かれています。部活動をきちっと定義したものの中では、これが一番わかりやすいかなと私は思っています。最初の話に戻りますが、そもそも部活というのは、「生徒の自主的、自発的な参加により行われる活動」です。だから本来であれば生徒が活動を組織して、サッカーをやりたい者が集まって、サッカー部を作って、「先生、〇〇先生サッカーのご経験があると聞きましたので顧問お願いします」というのが本来の姿です。伝統のある都立高校では、形式的にだそうですが、いまだに 4 月になると「先生、今年も顧問お願いします」と生徒が挨拶に来るということを私は聞きました。ですから部活動というのは本来、生徒のものなのです。教師のものではないのです。そこをちょっと勘違いしている先生が多いのかなと。逆に言うとそこで苦しんでいる先生が多いのかなと思うわけです。これは、4 年前の 92 回全国高校ラグビーで優勝した常翔学園の野上先生のインタビューの中からですが、「遠征に行ったニュージーランドでコーチが語った。うまくいったプレーがいいプレーだ。今までの自分は練習通りのプレーを押し付けていた」例えば僕らもそうですが、片手でポーンとパスをしたりすると、「軽いプレーをするな」と言っちゃうんですね。だけどニュージーランドでは、味方にすぽんと入れば「ナイスプレー」と言われるそうです。「形なんかどうでもいいんだよ、パスがきちっと通るということが大事。うまくいったプレーが、いいプレーだ」というようにニュージーランドではコーチの方が語っていたと。そこで野上先生ははっと気づいたんですね。それで「ラグビーは楽しくやらないかん」「俺がチームを強くする」という考えがそこで消えたそうです。そして、全国大会に進んでいきます。その全国大会では、大会中はメンバーも戦い方も選手たちが決めていたということです。それで優勝しました。その時のコメントが、「よく考えればチーム運営に自分の意見が反映されればうれしいし、自分たちで決めたことだから一生懸命やるんですよ」。これが部活動なのかなと自分は思っています。ここまででちょっと一段落なんですけども、いかがでしょうか。

中塚　ここまででもかなり盛りだくさんだったと思いますが、懐かしい映像から始まり…。

嶋崎　先ほど氏家さんに聞いた韓国の部活動ついて話していただけますか。

氏家　韓国は、エリートコースというのができあがっていて、中学校の頃から学校運動部活動に参加したらオリンピックとか世界選手権に行くようなコースが準備されています。けれど、そこから脱落してしまうと、もうその競技の地域の生活体育の大会とかにはほぼ出られなくなってしまいます。日本とはとても違う環境だと思います。韓国は学歴社会な国なので、学校の部活動に参加しない生徒たちは勉強重視です。どうしても運動をやりたいという子たちのために、日本とは違って体育の授業以外の運動に関する活動はすべてスポーツ講師という専門の資格を持った先生方がいらっしゃって、その先生方が放課後体育といってサッカーをやりたければサッカーの専門のコーチに来ていただいて月に 1000 円を払って毎週水曜日にやるというような形を取ったりしています。それ以外にも、創作体育とかいろいろな名前で地域ごとにやったりしています。日本の学校の運動部活動は教員が指導する形だと思うのですが、韓国では学校の体育の授業と体を動かす運動の活動で指導者が完全に変わっているのがとても印象的でした。以上です。

嶋崎　ありがとうございます。中国はいかがでしょうか。

鈴木　中国はですね、そもそもスポーツの在り方そのものが日本と違っています。まず金メダルというものが、スポーツイコール国家のために金メダルを取らなければならないという前提でスポーツをやりますから、自分たちが楽しむためにやるとか学校教育の中でスポーツを使って何かこう体力をつけようとかという発想がまず学校の先生たちにはありません。いきなりありませんと言い切っちゃうのはどうかと思うんですけど、まぁほとんど見受けられないというのが現状です。そもそも、スポーツはスポーツ庁が管轄をして、そこは、オリンピックで金メダルを取れるアスリートを育成するというのが一番の使命です。一方、教育のほうを管轄している教育部のほうでは、スポーツサイクルというのはやるんですけど極めてレベルの低い大会が行われていて、なぜかというと基本的には日本のように毎日部活をするようなことはほとんどなくて、やはりその韓国の現状とちょっと近いのかやっぱり学歴社会がすごく激しい国で、まぁ勉強する時間を惜しんでまでこう部活をすることの意味がそもそも感じてもらえない学校の先生が多いなということで、なかなか毎日運動することの意義や楽しみが生み出されないのが現状であります。ところが最近 2008 年の北京オリンピックを皮切りに、そもそもスポーツのために、金メダルのために、52 個の金メダルを取って世界一になったのは良かったねという一方で、私たちの生活がこのスポーツの恩恵をどうやって受けれるんだと、オリンピックで世界一になりました、すごい国になりました、でも私たちの日々の生活でスポーツの場ってほとんどないよねというのがメディアを中心にすごい大論争になってですね、やっぱり、北京オリンピックあたりからスポーツでメダルを取るだけじゃなくて、国民一人ひとりがスポーツを楽しむ環境を作っていこうというほうに方針をがらりと転換をしまして、それから、やはりその学校スポーツの中でも、まぁあの韓国の事例に近いんですけども先生が体育を教えること以外では部活としてはやってはいないんですけれども、例えば昔プロの選手だったという人がちょっと学校に来てサッカーを教えたりとか、元プロの楽団だった人が学校に来て楽器を教えたりというのが、最近ぽつぽつ出始めています。あともう一つは、国ももう政策を一気に方針を転換して、学校教育の現場もそうですけど社会体育や社会スポーツみたいな位置付けで、どんどんと地域にフットサルのコートやバスケットのコートを作って楽しんでいるような人たちがいるという現状にようやくなってきた。顕著なのが例えばマラソン。これはもう今調査をした結果が出てるんですけど、自分たちが生活の中でスポーツを楽しんでいると実感している、一週間に 1 回私はスポーツをしていますという人が、今だったら 40%超えているらしいです。僕が 10 年前に行っていたときはほとんど周りで誰もスポーツをしていないという感じだったのですが、ようやく 10 年くらい経ったら 2012 年から 2015 年くらいになったら、マラソン大会もかつては 20 大会くらいしかなかったのが今やもう 300 大会くらいあるというのが現状になったり、それこそ国民がスポーツをしているっていう意識が芽生えてきたなぁというちょっと転換期が中国ではありました。クラブの話からはちょっとそれるのですが、スポーツに対する認識っていうのがだいたいこの 10 年で変わってきたなという実感はあります。

嶋崎　ありがとうございました。後はよろしいでしょうか。

Ⅲ．運動部活動の現状と課題

1．教師の部活問題

そうしましたらブラック部活問題にいきたいと思います。これは、1992 年 4 月 20 日の朝日新聞に載っていた投書です。投書の主は高校の先生を夫に持つ 25 歳の主婦の方、中塚先生、だいぶ耳が痛いですよ。

学校の部活指導には専門家が必要(声)

○○市　○○ ××（主婦　25歳）

私の夫は高校の教員で、軟式野球部の顧問をしています。大学時代は全く別のスポーツをしていたので、技術指導など全く不可能です。が、家でも練習したりして、少しでも生徒の期待にこたえようと努力しています。

公式戦のある時は、日曜日が連続してつぶれ、一度も休みがなかった月もありました。休日出勤の手当はわずか1500円です。生徒が事故を起こした時には責任を負わされる立場にありながら、それに見合った保障など全くないのが現実です。

もうひとつ気掛かりなのは、夫の健康問題です。家に仕事を持ち帰って、夜遅くまで机に向かっています。過労のため1年前には入院しました。「過労死」という言葉を新聞などで目にするたびに、夫のことを思わずにはいられません。

教師のボランティア精神だけをあてにしている現在のクラブ活動は、もう限界にきているのではないでしょうか。

指導は専門のインストラクターに任せて、教師の負担を軽くしてほしいと思います。

（1992年4月20日　朝日新聞朝刊（声）

33

投書から見えてくる部活動の問題点

- 未経験での顧問担当。それ故自助努力
- 土日も指導のために出勤
- 土日の出勤に対する手当はごくわずか
- 事故が起きた場合の責任が問われる
- 過労による健康問題
- 家でも遅くまで仕事
- 教員のボランティア精神に依存した指導
- 現在の制度上の限界
- 当の競技を専門とするインストラクターの導入

34

これ、25 年前の投書です。いったい何が変わったのでしょうか。何も変わっていません。今もこのままです。まぁ 1,500 円ではなくなっていますが。そこはちょっと変わりましたけど。まぁ全く変わっていません。これが現状です。私は授業で、「この投書から読み取れる問題点を箇条書きにしなさい」というのをよくレポートの課題に使っていますが、これを箇条書きにしてみるとこんな感じになります。まず、未経験でも顧問を担当しないといけない。そのために先生方はみんな努力をします。私の知り合いでラグビー部の顧問になった国語の先生は、ラグビーのクラブチームに入って、自分でラグビーを経験して、それで教えています。そんな人もいます。それから土日も当然、試合などがあるので出勤になります。手当はごく僅かです。また事故が起きた場合、当然責任問題です。それから休みはないです。私も 2 ヶ月くらい休みがないのは、高校教員のときは普通でした。だからいつも疲れています。家でも遅くまで仕事。私は家で仕事はしませんでしたが、家に帰ってくるのは遅かったです。当然ボランティア精神ですね。だから、今の部活動制度というのは制度上もう限界にきているわけです。そこで、競技を専門とするインストラクターを導入したほうがいいのではないかという話になっています。このような問題点があるわけです。

さて、そんな中で「ブラック部活動」ということばはどこからでてきたのかというと、これですね「部活問題対策プロジェクト」、これが SNS を利用して、このような漫画などを使って、先生たちの苦労というのが広く世の中に知れ渡っていくわけです。そして一昨年ですね、オンライン署名サービスの

Change.org というのを使って署名を集めました。「部活がブラック過ぎて倒れそう、顧問をする、しないの選択権をください」。顧問をやりたい人はやってもいいんです。でも僕たちやりたくないんで、やりたくない人に強制しないでねという呼びかけです。これが 2 ヶ月で 23,000 人を超える署名が集まりまして、2016 年 3 月 3 日には、文部科学省に 23,522 人分の署名が提出をされました。代表的なサイトやブログとかですが、さっさきほどの「真由子さんのブログ」とか、「部活について考える、リラックマモンさんのブログ」とか、「部活動のあり方はおかしい、ゆうけんさんのブログ」などがあります。それから「部活動問題対策プロジェクト」のホームページもあります。これをバックに一躍世に出てきたのが名古屋大学の内田良さんという金髪の先生です。彼は見かけはあんなですが、とてもまじめないい人です。彼が先頭に立ってどんどんメディアに出てこういうことを広めていったわけです。それからこういう資料も出ましたね。OECD の国際教員指導環境調査です。日本の先生は OECD の先進 34 カ国の中でダンロツに勤務時間が長いです。週の勤務時間が 53.9 時間。加盟国の平均が 38.3 時間。授業のコマ数が多いのかというと、実は授業の時間数は諸外国のほうが多いです。では何が多いのかというと、課外活動です。部活なのです。それと事務作業が多いということがわかります。やはり部活ですね、この部分が非常に多い。

OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）2013 調査

教師の部活問題を整理しますと、いわゆる無賃の長時間労働の強制が行われている。それによって健康被害や精神疾患、過労死なども考えられる。それからプライベートの剥奪ですね。家庭崩壊、部活離婚などというのもあります。実際にある強豪高校のラグビー部顧問、せっかく結婚して子どももできたのですが離婚しました。この界隈の高校です。どことは言えません。実際こういうことは起こっていますし。家庭崩壊を防ぐために僕らはどういうことをしているかというと、飲み会をするときに、ラグビー部の顧問はみんな奥さんを連れて行くのです。奥さんは、奥さんたちどうしで勝手に盛り上がって旦那の悪口を言っておいてもらうわけです。そうすると僕らも心置きなく酒が飲めると。一緒に旅行も行きます。そういう努力をして、何とか家庭崩壊を防ぐということをしていました。それから、教員の本来の仕事というのは授業です。この準備の時間が不足してしまったり、あるいはクラスの生徒とゆっくり話をしたいのに心に余裕がなかったり、あるいは部活の練習に行かなくてはならないので、「今日は、…」などと言って生徒をほったらかしにしてしまったり。本来の仕事であるホームルーム経営とか授業準備というもが

疎かになっているのではないかということが大きな問題になるわけです。このあたりが教師の部活問題です。

ちょっとだけ、もしここで質問があれば何か。よろしいでしょうか。

岸卓巨　ここまでやらなくちゃいけないっていう決まりがあるんですか。

嶋崎　決まりはありません。

岸卓巨　土日は私はやらないって言ったらいい話じゃないんですか。

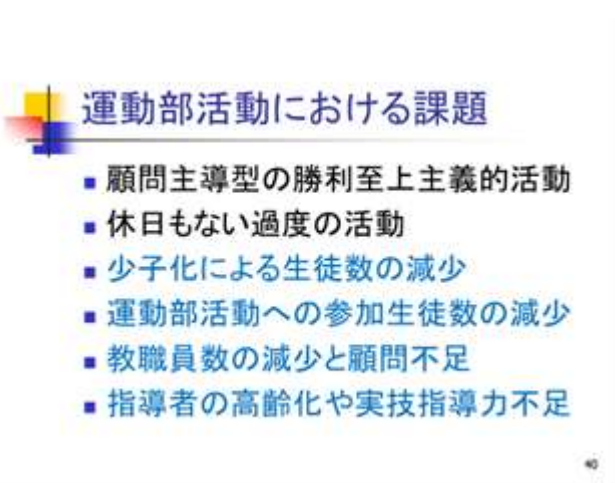
嶋崎　はい、それは親のクレームで大変なことになります。先生はやる気があるのかと。「自分たちの子どもが強くなりたいと言っているのに、なぜ子どものためにできないんだ」と言われますね。

一方で、こういう場合もあります。「先生、夏休みは休みをください。家族で旅行にも行きたいんですよ」という親がいます。両方いるのです。非常に難しいです。生徒も両方います。もう毎日やりたいやつもいれば、休み欲しいというやつもいる。毎日部活をやる根拠は全くありません。みんながやっているから、ということです。みんながやっているから、先輩たちもやっていたから若いやつもやらなきゃいけないとか、みんながやっているから、やっている。「隣の学校のサッカー部は毎日練習しているのに俺たちは週 2 回だと勝てないよね」というレベルです。実際、根拠は全くありません。逆に言うと、だからやらないことに根拠を持たせるということも考えられます。後で出てきますが、総量規制をしようという話も今出てきています。週 3 日以内にしろとか、土日は片方必ず休みなさいとかという通達が出れば、それが決まりですから決まりを守れということになります。現状、部活動は教育課程外にある活動なので、縛りは何もないので無制限に行われているというのが実態だと感じます。

よろしいでしょうか。先生方がたくさんいらっしゃるので、後ほどそれぞれ現場の先生方に状況を聞いていただくのが一番いいかなと思います。

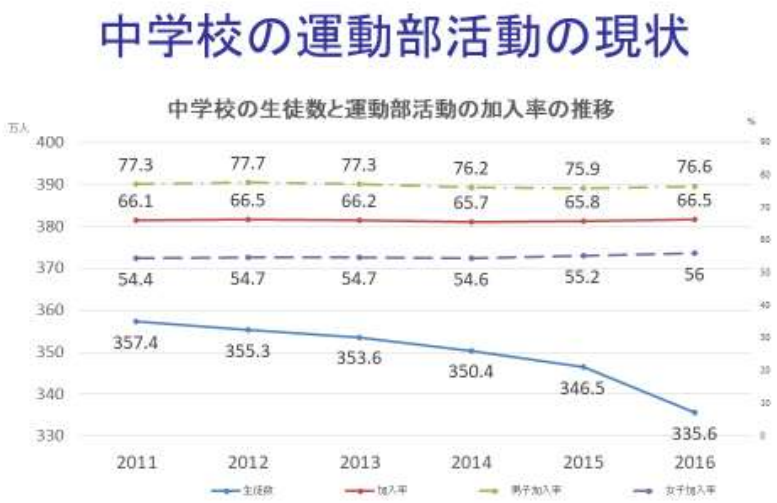
2. 運動部活動の現状と課題

部活動の課題ですが、今話したように、「やりすぎ部活」も問題です。顧問主導型の勝利至上主義的活動や休日もない過度な活動、実はこれも大きな課題ですが、今問題になっているのは下のブルーの字です。少子化によって生徒数が減って部活をやる人が減っています。それから部活に参加する人も少し減ったりしている。生徒数が減れば、当然総数が減りますからパーセンテージは同じでも、数は減るんですね。そうする、例えばラグビーのような 1 チーム 15 人で構成するようなチー



ムスポーツはチームがもたなくなります。実際今、東京都高体連ラグビー専門部は 80 数校の加盟校がありますが、その中で単独でチームを作って出られるチームは 50 数チームです。残りの 30 校くらいは、10 チームくらいの合同チームを組んで出てきます。都立高校で単独で出てこられる学校というのは 10 数校です。都立高校の場合、子どもの数が減れば学級減になります。学級の数が減れば当然 8 学級を 6 学級、6 学級を 5 学級としていきますから、生徒減になります。しかも、中高一貫にするともっと減ってしまうので、なかなかですね単独校でチームを組めない。それから、当然生徒の数が減れば教職員の定数も減りますので顧問をやってくれる先生がいなくなってしまいます。そして若い先生が入ってこないので、顧問はみんな高齢化していく。そして、採用される先生は、必ずしも実技指導力のある先生ばかりではない。こういうことが今、あまり取りざたされていないかもしれないですが、非常に大きな問題になっています。

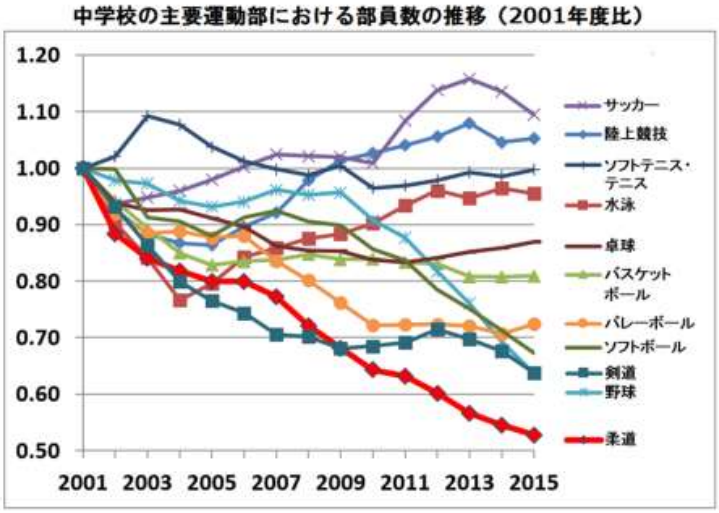
直近の運動部活動の現状です。これは笹川スポーツ財団の調査の数字です。中学校の生徒数と運動部活動の加入率です。生徒数は 2011 年が 357 万人くらいなのが、5 年間で 336 万人くらいまで減っています。加入率は男子がだいたい 77%、女子が 55%くらいで平均して 66%くらいでほとんど変わっていません。ほとんど変わっていませんが、当然分母が減っていますから、参加生徒数は減っています。



笹川スポーツ財団（2017）「スポーツ白書2017」pp.102

高校の場合、生徒数が減っていますが、加入率は若干上がっています。運動部員数ですが、高体連と高野連の登録者を足したものです。だいたい 140 万人くらいですね。そうすると高校生でだいたい 140 万人くらいの人が部活をやっていて、中学生で 220 万人くらいの人が部活をやっていると。合計で 360 万人くらいの人が部活動というものに参加をしているということになります。だいたい計算すると、部活はまじめにやっていると年間 700 時間くらいやっているそうです。高校の授業 1 単位で週 1 時間でやっていると 35 週ですから 35 時間ですね。例えば、数学の授業週 3 回やっても 1 年間で 105 時間。5 時間やっても 175 時間ですから、圧倒的に部活動の時間のほうが長いということがわかるわけです。これは大変なことです。

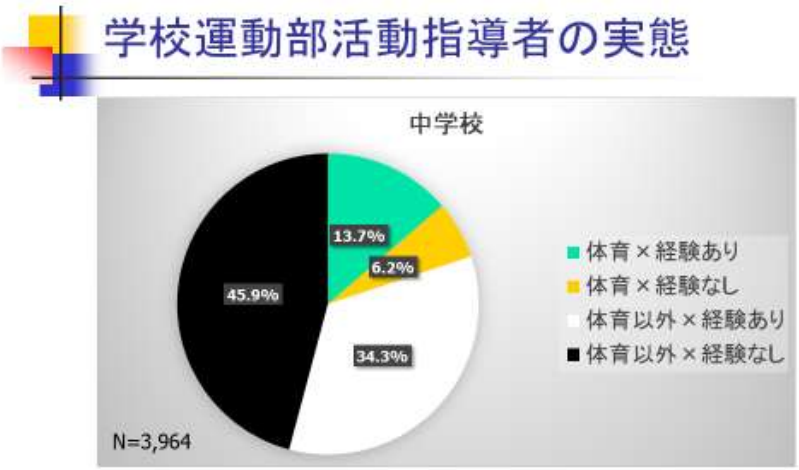
笹川スポーツ財団（2017）「スポーツ白書2017」pp.103



http://blogos.com/article/152815/

そして競技によって部員数の減り方が一番厳しいのが柔道です。2001 年から 2015 年までで中学校の柔道部員の数は半分になっています。次に減っているのは剣道です。剣道も 6 割、野球も同じです。野球も 6 割です。バレーボールは 7 割くらいという感じです。逆に増えているのは、サッカーと陸上です。それから、テニスや水泳は横ばいくらいという感じです。競技によって極端に差があります。柔道はかなり今危機的な状況ですね。事故も多いですし。それから野球もこんなに下がっているのですね。今はもう男子のバレーボールは非常に厳しいです。チームを組めないというところが圧倒的に多いです。男子バレー部、女子ソフトボール部、それから柔道、剣道ですね。剣道は、5 人の団体戦も組めないで、3 人で出てくるという。最初から 2 本取られているというようなこともあるようです。

3. 外部指導者、部活動指導員



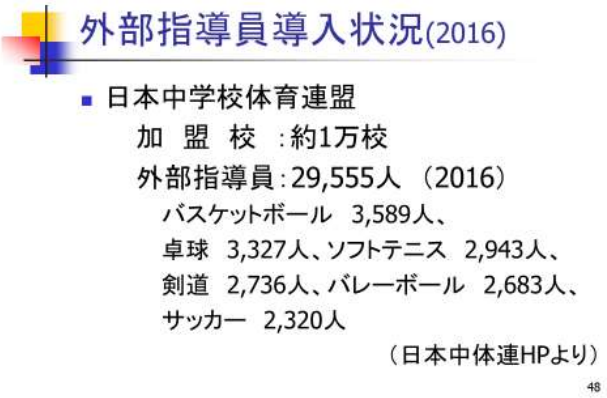
（公財）日本体育協会（2014）学校運動部活動指導者の実態に関する調査

指導者の実態ですが、2014 年の日体協の調査によると、体育の先生でその競技を経験している中塚先生みたいな先生は 13.7%しかいません。体育の先生ですが、違う競技を教えているという人が 6.2%、私みたいに国語の教員なのにラグビーをやったことがあるという人が 34.3%。保健体育の教員でもなく、競技の経験もない人が 45.9%顧問をやっております。問題はここです。この人たちがやはり困っているわけです。ちなみに高校でも、40.9%の人がやはり保健体育以外で競技経験なしということになっています。そういう人たちが何で悩んでいるかというと、「自分自身の専門的指導力不足」というので悩んでいるのです。体育の先生などが何で悩んでいるかというと、「忙しくて指導ができない」ということがわかっています。

このような問題を改善しようとして出てくるのが、いわゆる外部指導者です。いつ頃から出てくるかというと、2000 年の「スポーツ振興基本計画」です。そこに、こういう文言があります。「地方公共団体が設置しているスポーツリーダーバンクの一層の活用に努め、専門的指導を行うことができる人材を確保し、指導の充実を図る」地方自治体がスポーツリーダーバンクというもので指導できる人を登録制にして集めておいて、そこから専門的指導ができる人を探して学校に入れていこうという発想です。それから 2012 年の「スポーツ基本計画」では、「学校と地域のスポーツ指導者との連携を支援することも期待される」

と書いてあり、文部科学省としても外部指導者の導入を促進しています。これもまた外部指導者で学校に入られている方、現の話を後で話していただけたらと思います。

　では、どれくらい活用されているのでしょうか。日本中体連加盟校約 10,000 校に、2016 年で 29,555 人、2017 年もほぼ同じ 30,000 人強です。バスケットボールが 3,589 人、卓球が 3,327、ソフトテニス 2,943、剣道 2,736、バレーが 2,683、サッカー2,320 人、結構な人数が外部指導者として登録されています。実際はボランティアでもっと入られている方いらっしゃると思います。これは正式に登録されている方でこれだけ入っているということです。ところが、都道府県で非常に差が激しいんですね。東京や福岡、愛知などという大都市県で多いというのはわかりますけども、山形県とか岐阜県も 1,000 人以上の外部指導者が導入されています。逆に言うと、岡山県は人口も多いのではないかと思うのですが 139 人、鳥取、和歌山にいたっては 86 人と 74 人と二桁です。都道府県によって非常に格差があります。これは、研究者としてきちんと調査しなければいけません。



　そして、いよいよ部活動支援員の配置です。これは 2015 年 6 月の朝日新聞です。「小中高校で教員以外の人材を充実させる『チーム学校』について、中央教育審議会は 12 日、結論のたたき台になる骨子案を議論した。教員とは別に、部活の顧問や引率などができる部活動支援員（仮称）の配置を新たに検討することなどが盛り込まれた」とあります。2015 年あたりからこういう議論が出ているわけです。それで私たちは、2016 年 6 月号の『体育科教育』という雑誌で、「部活動指導員で部活は変わるか？」という座談会を早稲田の友添先生、首都大東京の西島先生、それから名古屋大学の内田良先生、金髪の先生と私と 4 人で座談会をさせていただきました。ここではこのようなことを話しました。対外試合は、中学校のブロック大会、小学校では越県を認めないくらいが現実的ではないかという議論もしています。後でちょっとこのお話もさせていただきたいと思います。そしてあとは、2016 年 8 月に『運動部活動の理論と実践』という大学生向けの教科書も作成しました。先ほども述べたように、実は運動部活動って 700 時間もやっていて、要は教科の教育よりたくさんやっているのに、教職課程の中に部活動の顧問になるための指導を授業はないのです。これは問題でしょう。教職課程で学ばないで教員免許を与えて、彼らに部活動の顧問をさせていいのかということが問題になりまして、こういう教科書を作りました。これを使って、保健体育科の教員免許を取る学生たちを中心に、運動部活動の理論と実践について教えていこうという、そういう授業を立ち上げましょうということです。現在、授業を行っ

ているのは筑波大学、それから大阪体育大学、宮城教育大学などです。私たち国際武道大学でも、来年から授業を展開するということになっています。

そもそも、部活動指導員という職員を学校に置いたら、今の部活は変わるのか、本当に救世主になるのということです。まず、その人たちに求められる資質、能力とは何だろう。国家資格化しようとか言っていますが、どういう基準で資質、能力を育ててそれを資格にするのでしょうか。それから、そういう人材をどうやって確保するのでしょう、そのときの待遇はどうするのでしょう、人件費は誰が負担するのでしょうか。基本的に今は各自治体持ちです。自治体はそんなに体力はありませんからなかなか導入できない。文科省は来年度の予算で概算要求に、これに対して予算請求をしていますが、これもちょっとどうなるかわからない。また、運営面での課題としては、監督・事故等の責任はどうなるのか。それから教員には教員の独特な文化というものがありまして、外からの人がなかなか入り込めない。部活動指導員が入ってきたとき、そういう教員文化との兼ね合いがどうなるのか。実際、外部指導者と教員とがうまくいかないという例も色々と聞いています。それからこの人たちへの期待ですね。役割、機能というのをどのようにしていったらいいのか。ただ部活に貼り付けてスポーツ指導するだけなのですか、その人を公務員として雇うのですかというような話をしているわけです。そんな議論をしていたのですが、議論よりも実際のほうが先に行きました。これは、2017 年 3 月 14 日の毎日新聞ですが、「文部科学省は 14 日、中学校や高校で部活動の指導や、大会への引率をする部活動指導員を、4 月 1 日から学校教育法に基づく学校職員に位置づける省令を公布した。指導員を部活動の顧問とすることもできる。文科省は 14 日付で各都道府県教育委員会などに、勤務形態や報酬など必要な規則を整備するよう通知を出した」とあります。実際に岡山県がこれに基づいて制度化をしているという話を聞いています。実際には、今年度からこれを運用しているところはほとんどない。それは予算措置がされていないからです。予算がないのでそれは当然言われてもできません。そこで予算措置の話ですが、これは文部科学省の来年度・平成 30 年の予算要求の骨子の中からですが、部活動指導員配置促進事業ということで 15 億円、7,100 人分と書いてありますけども、こういう人を雇うお金を予算要求しています。これによって、部活動指導者の専門的な指導力を高める、それから部活動の質的な向上をするということと、教員の働き方改革をということです。部活動指導員は、顧問、実技指導、単独で引率、容疑・施設の安全管理などができます。

外部指導員の方は単独で部活の引率はできないのです。そこが大きな違いです。制度的に学校職員に位置づけられますので、顧問になれるし、引率もできるというところが一番の違いになっていくわけです。

導入事例です。世田谷区では、2006 年から「部活動支援員制度」があり、保護者や大学生らに時給 1,000 円~800 円で指導にあたってもらっているという事例がありました。岡山県は「運動部活動支援員派遣事業」といって、中学か市区町村教育委員会が人材を探して、県が非常勤職員として、原則 1 週間 7 時

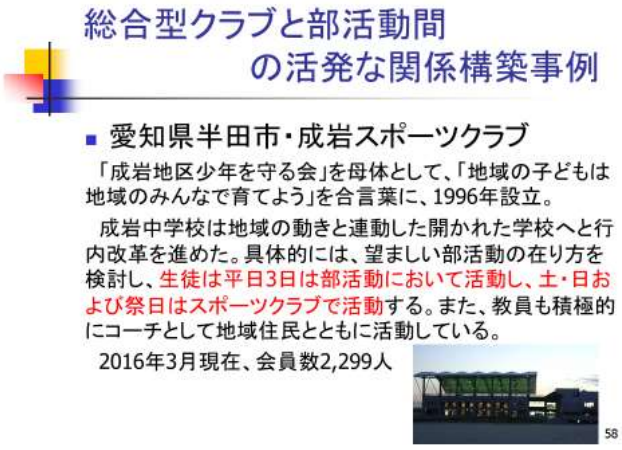
間以内で時給 2,740 円でこれを雇用しています。時給 2,740 円で 1 週間 7 時間働いて、1 月に 28 時間。月いくらになるのでしょうか。これでは生活できないですね。それから横浜市ですが、外部指導者を市の非常勤職員として雇用して勤務は月 5 回まで、1 回 2 時間程度で報酬は 3,000 円です。月に 5 回指導すると大体月 15,000 円です。こういった例はあるのですが、当然これが職業として成り立つということはないわけです。私は、外部指導者をかなり調査しました。アンケート調査もしました。その中で、一番うまくいっている例というのは、退職教員です。その部活の顧問をしていた先生が定年になっても、教員としては退職なのだけれども、そのまま部活の顧問として、指導者として残ってもらってそのまま指導を続けていただくというのが、最もうまくいっている事例として挙げられていました。これはかなりうまくいっているようです。それはそうですね、OB も OG もみんな先生は先生ですし、学校のことも良くわかっていますし。現場の先生たちともコミュニケーションも取れるでしょう。外から人が入ってくるというのはなかなか難しいところがあるようでして、そういうケースが一番いい事例として挙がっていました。だから、今後こういうことは考えないといけないのではないでしょうか。60 歳で定年になって再雇用で働くときに、例えば授業だけを担当するいわゆる非常勤講師のような形で働くというケースもあると思うのですが、そうではなくて、部活動の指導で自治体に再雇用をしてもらうというケースも考えられると思います。

一方で民間委託というのも出てきました。杉並区では、2013 年度から「部活動プロフェッショナル指導」として、要望のあった 10 校で土日曜日を原則として月 5 回民間企業など 10 団体に委託しています。生徒は 1 回 500 円の参加費を負担する。ここが問題です。1 回 500 円を払わないといけない。受益者負担ですから、スポーツを行うのにお金がかかるのは当たり前ですけれども、そもそも運動部活動の良さというのは子どもたちにスポーツをする機会を均等に与えられるということです。ここが重要なのです。今は格差社会ですから、経済格差、要は家庭の社会資本、経済力によってその子どもたちの学力であるとかスポーツの能力であるとかが規定されていくという、あるいは健康格差も言われています。運動部活動の良いところは、生徒みんなが等しくスポーツをできるというチャンスがそこにあるということです。500 円ですけれど、やはりそれは阻害してしまう要因になってしまいますから、これはいかがなものかと。しかしまぁ参加している人たちの声を聞くと非常に満足をしているようです。500 円の価値はあると見ているようです。（発表者注：現在、費用は自治体の負担となり、無償で指導が受けられるようになっている）大阪市は、2015 年度から 8 校をモデル校に指定して民間に委託しています。この費用年間 2,500 万円は市が全額負担しています。今、部活の指導をする人たちを派遣しますという企業がどんどん出てきています。そういうところに参入していく企業はスポーツ関連の企業のみならず、塾、予備校など教育産業を含めていろいろな会社があります。部活動指導員制度とか外部指導者の話がどんどん出てくれば、当然そういうところを狙ってくる企業も、あるいはもしかすると NPO などもあるかもしれません。

4. 総合型地域スポーツクラブとの連携

一方で、総合型地域スポーツクラブとの連携はどうなのか。2000 年にスポーツ振興基本計画が出て、2010 年までに全国の各市区町村に少なくとも一つは総合型地域スポーツクラブを作りなさいというのが出て、2015 年現在で 3,550 クラブ、もう 80%以上の市区町村に総合型地域スポーツクラブがあるわけです。ここの連携はどうなのかということです。「緩やかに活動主体を学校から学校を含んだ地域社会に移していくことが望ましい」などと順天堂大学の黒須先生はおっしゃっています。では、実際どうなっているか。うまくいっている例もあるわけです。愛知県半田市の成岩スポーツクラブ、これはもう有名です。これは、成岩地区少年を守る会が母体となって地域の子どもは地域のみんなで育てようを合言葉に 96 年に

設立されました。そして成岩中学校はこのスポーツクラブと連動して望ましい部活動の在り方というのを検討して、生徒は平日 3 日間は部活動で活動して土・日や祝日はスポーツクラブで活動する。教員もできればスポーツクラブの会員になって、そこで指導者として地域住民と一緒に活動する。2016 年 3 月現在会員数は 2,299 人ということで、非常にこれうまくいっているわけです。うまくいっている秘訣の一つは、これを立ち上げた方が成岩中学校の先生だったということです。やはり、その学校の先生が主体となっているので、学校の施設を使ったりとか学校との連携、交渉がうまくいくわけです。かなりうまくいっているのは、そういうところに多分一つのポイントがあるのかなというふうに私は見ています。それからうまくいかなかった例もあります。大分県にある N スポーツクラブです。N 中学校の A 先生が、部活とクラブの連携ということで、学校を説得するわけです。先ほどの成岩と一緒で、N 中学校部活動運営計画が PTA 総会で承認されて、生徒の 100%、教職員の大部分が N スポーツクラブの会員になって、土日祝日は N スポーツクラブで活動するという形に変えました。ところが、これ今はダメになりました。原因は何か。2009 年に N クラブのスタッフがバレーボールの指導中に生徒が骨折する事故が起こります。この時、補償の問題はどうなるんだということになって、もめまして、実は部活と N クラブの関係はここで消滅してしまいます。結局、学校の部活動は既存の形態を維持するということになったのです。大分大学の谷口先生が、これを論文にして体育学研究に載せています。



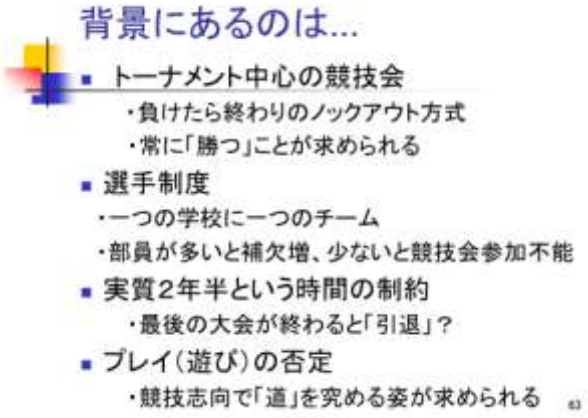
Ⅳ．これからの運動部活動

1．ガイドラインの作成

「中高校に部活に休養日案」、「部活休養日全国調査へ」などという新聞報道が出てきています。文科省も「ちょっとやりすぎはいかんのじゃないのか」と。先生の働き方改革ということもあり、過熱する部活動にちょっと待ったをかけるような動きもあります。そして、静岡市は「中学校部活動ガイドライン」というガイドラインを作りました。「部活動の意義・目的は人間形成である」「部活動 5 原則」「生徒は主人公、体罰や暴言禁止、適切な活動量、安全管理の徹底、達成感を持って取り組める活動」などと記されています。さらに、総量規制です。「活動は週 4 日、原則として火、水、金と土日のどちらか一日」にしましょうと。そして、「ノー部活デーを年間 6 日」作ります。5 月の第 3 土曜日、11 月の第 2 土曜日、12 月の第 1 日曜日は必ずお休みにしてください。それ以外にも各中学校で 3 日間全部活の休みの日を作ってください。「一月の部活は平均 45 時間」でお願いします。静岡市は、2018 年度から行いますということでこれを作成しました。

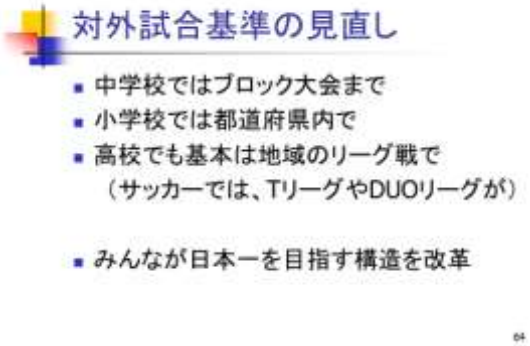
2. これからの望ましい運動部活動のあり方

では、時間も迫ってきたので、まとめに入りたいと思います。ここからは、私の個人的な考えです。現在、多くの部活動が週に 6 日から 7 日、土日も活動しています。それがあたりまえ。多様性が認められないというところに問題があるのではないでしょうか。例えば、シーズン制でいいのではないか、あるいはいろんなスポーツに取り組む総合型運動部というのがあってもいいのではないか。あるいはニュースポーツを楽しくやりましょうという部活があってもいいのではないかと思うわけです。それから、部活は週 3、4 日で試合のない土日は休みでいいのではないかと思うわけです。そのうえで、競技力向上、オリンピックを目指したい、トップアスリートを目指したいという人は、それなりのところにお金をかけて、時間をかけて行ってもらえばいいのではないか。部活はあくまでも、生徒たちにスポーツをする機会を均等に与えるということが使命だと私は思っています。アスリートの養成は競技団体を中心に民間クラブでもできると思っています。そういうところでやってもらえばいいのではないかと個人的には考えています。しかし、なぜこうならないかというと実は背景があるわけです。まず一つは日本の競技会のあり方、中高生の大会はトーナメント中心です。いわゆる負けたら終わりのノックアウト方式ですから、常に勝つことが求められるわけです。勝たなかったら次ぎの試合がないわけです。だから、何としても勝たない



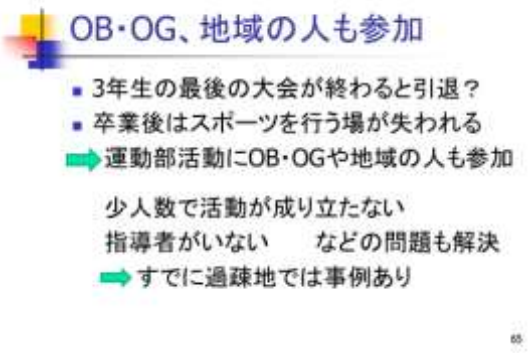
といけないからたくさん練習しなければならないとか、メンバーも固定したメンバーでなければいけないということになってくるわけです。だから、この競技会のあり方を変えていければ、大きく変わるのではないかと、私は思います。もちろんノックアウトの選手権もあっていいけれど、やはり地域にリーグ戦が必要かと思います。それから選手制度、一つの学校から一つのチーム、高体連、中体連ではこれが原則です。だから、部員が多いと試合に出られない生徒がいます。100 人部員がいても、サッカーだったら出られるのはスタメンの 11 人、交代選手だって何人もいないですよね。すると、大半の選手は試合にも出られない。逆に、部員が少ないと競技会に出ることもできない。チームが組めないと大会にも参加できない。ここにも問題があるのではないでしょうか。私は帝京高校にいましたから、サッカー部は多い時には 140 人くらいいました。少なくとも 90 人くらい、1 学年 30 人くらいはいました。3 年間 1 度もカナリア色のユニフォームに袖を通さずに卒業していく人のほうが圧倒的に多かったですね。それでいいのかと思って、「お前、そんなんだったらラグビー部に来いよ」と言っても彼らは来ないのですが。あと、実質 2 年半という時間の制約。入学してから夏のインターハイ予選が終わると引退です。引退という言葉はおかしいですよね。年を取って体が動かないわけでもないのに、スポーツは続けられるのに、みんな引退というのです。だから、その 2 年半、2 年 3 ヶ月とか 4 ヶ月の期間でチームを作らなければならない。それから、日本の部活動は play・遊びを否定します。どちらかというと競技志向で道を究める姿が求められる。部活をやっていると「遊びでやっているんじゃないんだぞ」と先生に言われることがあります。「いや遊びなんだけどな」と思ったりするわけですが。

私が取り組まなければいけないと思うことは、やはり対外競技基準の見直しです。これ、もともとはあったのです。それを、東京オリンピックに向けて競技力を上げていくために、若年層も競技力向上のために大会や全国大会をどんどん入れていったわけです。だからもう、戻したほうがいいですね。中学校はせめて関東大会とか、近畿大会とか、ブロック大会まで。小学校で全国大会なんて絶対いらないです。都道府県内で大会をやるくらいで十分でしょう。やはり高校は選手権、伝統ある選手権ですからこれをなくせと言うのはちょっと無謀だと思います。そこまでは言いませんが、基本的には地域でリーグ戦を組む、サッカーは T リーグや DUO リーグとかリーグ戦形式になっているわけですから、どの競技もややはりこうやって勝ったり負けたりしながら楽しんでいくというスポーツにしていかなければならない。何もみんなが日本一を目指す必要はないのです。日本一を目指せる人がわずかしかいないことはみんなかっています。だから、日本一を目指す人とそれなりにスポーツを楽しむ人とを分けていけばいいと思うのです。私が高体連ラグビー専門部というところでこういう発言をすると、「何で俺たちの上を目指す心を挫くんだ」みたいなことを言われて、すごく先輩に怒られました。「どんなチームだって日本一目指しているんだよ」と怒鳴られましたけど、そんなことはないと私は思っています。私が教えた生徒たちも、勝ちたいとは思っていたし、「このチームに勝つぞ」とか、「絶対今回はベスト 8 入って関東大会行ってやる」とか、言ってましたが、「日本一を目指す」というのは聞かなかったです。子どもたちの方が現実的です。だから、先生だけがなんか気合入っているのではないかとか思ったりします。

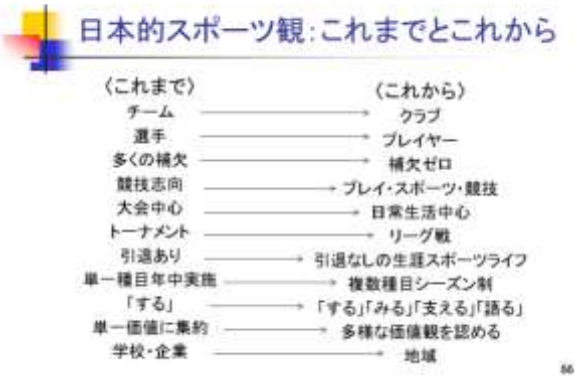


とにかく少子化で子どもの数が少ないですから、OB や OG、地域の人たちが参加してスポーツ活動をやったほうがいいと思います。3 年生最後の大会が終わると引退なんておかしいですよね。一緒にやった

らいいのです。受験勉強しながらその邪魔にならない程度で、週 1 回でも 2 回でもボール蹴ったりすればいいわけです。ここで引退するとどうなるかというと、卒業後はスポーツをする場が失われてしまうわけです。サッカーボールを蹴り続けていれば、3 年生で大会がなくても、OB や OG になっても、あるいはおじさんおばさんになっても、地域で働くようになっても、高校生と一緒に土日はボール蹴ればいいじゃないですか。地方に行くと少人数で活動が成り立たないとか、指導者がいないという声をよく聞きます。

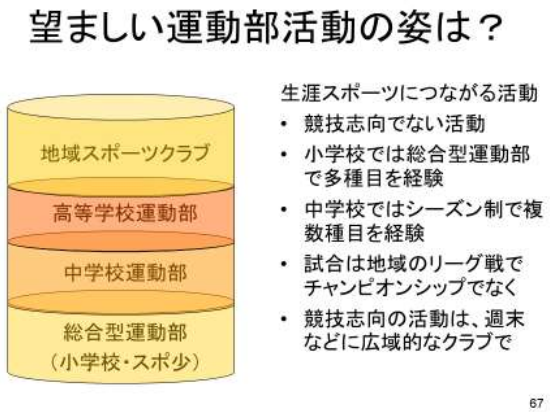


逆に、島嶼部では、生徒だけではスポーツ活動は成り立たなくて、OB も OG も地域の人もみんな一緒になって活動してますよ、という話も聞きます。だから、別にそれは過疎地じゃなくても、都会でも地域の活動としてやっていってもいいのかなと思うわけです。高体連や中体連の大会に出るときは高校生・中学生でやるとしても、日常の活動とか地域のリーグ戦はそれでいいのではと思っているわけです。



これはサロンでもよく使っている「日本のスポーツ観これまでとこれか」らという表です。今までのスポーツというのはこういう競技志向、大会ありき、一つの種目を 1 年間ずっとやり続けて道を極める、そういうものだったのを、もうちょっと緩やかにしていったらいいのではないかと思います。Play 志向で、リーグ戦で生活の中に位置付けて、引退なしの生涯スポーツライフで色々な種目をやっていく。当然「する」だけではなくて、「みる」、「ささえる」という活動も必要です。このような多様な価値観を認めたスポーツ活動というのを日本に根付かせていくとことが必要だと考えております。

最後に私が考える、望ましい運動部活動です。これは、私の個人的な考えです。運動部活動は、基本的には競技志向でない活動が望ましいと思います。小学校では、多くの種目が経験できるような総合型運動部。私がいた小学校は、1 学年 2 クラスしかなくて、しかも男子が少なかったので男子スポーツクラブというクラブ活動で、夏は野球をやって、冬はサッカーをやっていました。私はそういう経験をしてるので、それで十分楽しかったので、それでいいのかなと思っています。それから中学校では、できればシーズン制で複数種目を経験したらいいのではないか。高校になったらある程度ひとつの種目に特化してもいいのですが、試合はできるだけ地域のリーグ戦で。そして、地域のスポーツクラブ、生涯スポーツに繋がる活動になることが望ましいと思います。競技志向の活動は、週末にもう少し広域的なクラブで行う。これは競技団体を中心に。今、ラグビー協会では、アカデミーを各都道府県に作ろうという運動をしています。そういう競技団体が作るアカデミーとか、あるいは民間のクラブとか、いわゆる J リーグの



下部組織みたいなところとか。色々な方法があると思うのですが、競技志向の活動は、そういうところで行うべきと考えています。これが私の考える望ましい運動部活動の姿です。いろいろとご意見をいただければなというふうに思います。

最後に研究です。今多分この部活動研究ではこのお二方がオピニオンリーダーと思います。早稲田大学の中澤篤史先生、『運動部活動の戦後と現在』、彼の博士論文です。こちらはスポーツ社会学の立場からの研究です。それと宮城教育大学の神谷先生。神谷先生はどちらかというと教育学の立場、『運動部活動の教育学』という本もたいへん面白い本です。そして、これも宣伝しておかないと。『運動部活動の理論と実践』です。一人ひとりの生徒が輝く部活動を実現するためにということで中塚先生も１章書かれています。私も１章書かせていただきました。中塚先生は DUO リーグを紹介など、私は顧問教員のマネジメントに関するお話を書かせていただきましたけれども、まだご覧になっていない方は、一度お手にとっていただければと思います。これは大学生の教科書にするために作りましたので、非常に簡単に書いてあります。ぱっと読めばみなさんご理解いただけると思います。

発表は以上です。ちょっと長くなりましたけども、ありがとうございました。

中塚　ありがとうございました。先週ちょうど大阪体育大の『運動部活動の理論と実践』をテキストとする授業に行ってきたところです。去年はこの本を学生みんなに買わせていたらしいのですが、今年は買わせてないようです。

私は、嶋崎さんといつもこんな話しているから全部しっくり来るのですが、もしかすると初めて聞く話だったり、「え、そんなのあるの」だったりすることがあるかもしれません。残り時間を使って自由に意見交換したいと思います。質問でも、何でもかまいません。

嶋崎　私が話している話は、多くの部活動を持たれている顧問の先生とか、高体連、中体連で活躍されているような先生方とは、かなり違うと思います。多くの方は、こういう考え方はされていない。むしろこのあたりは相当異端です。

中西　たいへん貴重な機会をありがとうございました。一つだけお伺いしたいのですが、指導員の外部化という話をされていましたけれど、実際そのスポーツ選手やアマチュアのトップ選手でもその種目を引退して後でも、そのキャリアを生かせないというのは山ほどあって、そう考えると外部化は非常に有益であることは間違いないと思っています。でもほとんどの場合いわゆる企業参入という形で質の担保の問題が言われています。それについての対策としては、現時点ではどのようなことを考えられていますか。

嶋崎　私が考えているのは資格化です。部活動指導員になるための研修をきちんと受けてもらって、資格を取ってもらって指導に当たってもらう。トップ選手だったから OK ということではなく、きちんと。学校に入るということは、我々教員の立場から見ると誰でもいいとは全く思っていません。教育の視

点から指導していただける方に入ってきていただきたい。そこを理解していただける人に入っていただきたいと思っているので、そういうところをしっかりと研修していただくことが必要だと考えます。

中西　スポーツ指導員制度でそういう学校研修とか教育現場での指導に耐えられるような、例えば教育心理学とか、教育原理、教育指導方法という視点の基盤は作ってあるのですか。

嶋崎　似たような資格を取るときに、日体協などで多分基本的なことは学ばれていると思いますが。そもそも学校という組織のことは学校の中にいない人は全くご存じないと思います。そもそも学校はどのようになっていて、どのようなことが行われていてということを知っていただかないと、学校に入ってくるのは大変かなと思います。たとえ部活動の場面だけだとしても。その辺はスポーツ心理学というのとはちょっと違うかな。教育心理学ももちろん必要だと思うのですが、学校教育のシステムがわからないと多分お互い困ることが起こってしまうと思います。

中西　ということは、スポーツ指導員の資格をそのまま学校の指導に適用するには、カリキュラムの改訂を大幅にやらないといけないということになるのですか。

嶋崎　現状カリキュラムはありませんので、資格を付与するのであれば、そういうカリキュラムで作らないといけないということです。現状としては、何の研修制度もない状態で外部指導員を登録制度だけで活用しています。研修は各都道府県で行われていると思いますが、現状は資格を付与するためのカリキュラムというのはありません。実際に外部指導されている方の意見は、どうでしょう。

中塚　今日の参加者の中には外部指導者として学校に入られている方が何人もいらっしゃいますが、現時点で学校で外部指導員をするにあたって研修などはあるのでしょうか。

参加者　小学校でサッカーをやっていますけども、全くそういうのはないですね。ただ、一応上司が一人いて、僕はアシスタントでサッカーを教えているのですが、場所はただで貸してくれているって感じですね。部活じゃないです。サッカースクールみたいな感じで、一応お金も、普通のサッカースクールよりも安いですけど、いただいています。

参加者　外部指導員の方もいらっしゃいますよね。

岸弘之　僕はうちの息子が事務局をやっている父なんですが、彼が中学に入ったときに、小学校のときはいわゆる町のサッカークラブでコーチみたいなことをして、それこそ学校から依頼されて外部指導員になって 20 年くらいになるのですが。先ほど言っていたいい例に入るかわからないですけれど、総合型地域スポーツクラブが中学校・教育委員会のほうから依頼されて、うちの中学がホームグランドとしてやって、未だに部活動とそれ以外の土日は合宿とか、そのようなボランティア活動、南三陸に連れて行ったりとか、スポーツクラブの保険で活動していて、先生がいなくても僕が勝手に練習試合を組んでクラブチームを中学へ連れて行って、やっていることは部活動と変わらないけど

法的なことを言うと完全な地域スポーツクラブのという形で、だから保護者の方には全員会員になってもらっています。保険代も含めて。

中塚　子どもたちはスポーツ安全保険に入るんですか。

岸弘之　そうですね。地域スポーツクラブから会費をいただいて。その中にスポーツ安全保険も含まれているので、850 円プラス年間 4,000 円をいただいています。土日の活動や校外の活動なんかはそれで全部カバーされている状況です。僕は、たまたま小学校のときの育成委員会とか色々地域でサッカーやっていたおかげでいろんなとこでそれなりに信頼というか、あと民生指導委員です保護司ではないんですけれど、そういった青少年の活動とかしていましたり、PTA 会長やったりして、そういう形で学校からは大丈夫だろうみたいな形で依頼を受けたと思うのです。確かに今の話だと猫も杓子も、やればできるから、やったということになると僕も顧問との諍いは非常にありました。それこそ部活に行けば教員がいますから、お前はなんだという形で、先生によってはすごく外部の地域を、部活命という先生ほど強いですね。もう人格関係ないんで。僕も社会人になって何でこういうこと言われなきゃ、年下にこういうこと言われなきゃいけないんだ、というくらい結構な酷いこと言われましたけど、管理職とか教育委員会は理解してくれましたので、そのまま続けられているんです。そういった意味では、やはり生徒のことは知らないと僕もダメだと思うんですけど、そういった意味では学校の教員とは常に管理職も含めて、正直いろんな問題の生徒がいますので、もう遅刻はするは、提出物は出さないは、という情報を聞けばその子は試合には出さないから、ただサッカーうまいだけでそういうことになると部活ではなくなるのかなと。そういう子はクラブチームに行って勝手にやればいいなと僕は思っているので、そういう部活動というのは特殊な事情をちゃんと指導員でもなんでもいいんですけど学校と連携しないとなかなかうまくはいかないかなというのが実感ですね。

中塚　せっかくなので、この続きで。岸さんは中学校の外部指導員ですが、都立 T 高校の外部指導員の松並さんは、顧問とのことで色々悩んでおられているんじゃないかという話も、チラッと耳にしましたが、話せる範囲でかまいませんので。

松並　私は、ある都立高校の外部指導員を 5 年ほどやっております。そこで参加している地区のリーグ・DUO リーグで中塚先生が役員をやっておられ、知り合いになりました。わけもわからず、ちょっと苦情を申し出に体育教官室までいきなり伺ったことが発端なのです。そもそも、僕は外部指導者をさせていただいてもう 15 年くらいになるのですが、全て公立の中学校、高校なのです。そこに招かれるときはだいたい保護者か PTA の会長さんがちょっと見に来てくれないかと。要するに、顧問の先生と生徒たちとの、部活動の目的が違う。いろんな問題の相談をうけている間に何校か回っているところなのです。私がずっとやってきて思うのは、学校は顧問ありきなので、まずそこのところをきちっと整理していただければもうちょっと、今先生が講義していただいたことに広まっていくんじゃないかと。まず、学校の顧問の先生の意識や能力とまでは言いませんけれど、まず部活動とはなんぞやというものと、生徒のためにどうやってスポーツをするのかっていうことを、もうちょっと研究をしていただける先生が多くいればよろしいのではないかと個人的には思います。

中塚　ちなみに松並さんは相当言葉を選んでおられます。

嶋崎　でもそれは、個人の問題というか学校の問題でして、学校として部活動をどのようにするかっていう方針がどこの学校にも全然ないのです。だから、先生たちは熱くなる人もいれば、やりたくない人もいて、要は何でもありなのです。そこがおかしいので、学校として部活をどのようにして運営していくかが、ちゃんと顧問の中でコンセンサスが取れていれば、そういうとんでもないことはなくなるわけです。けれど、今は何でもできる状態にあるので、いわゆる学習指導要領の中の位置付けの問題もあるのですが、課程外だからなんでもできてしまうのです。そこが一番大きな問題で、そこをちょっと整理して、管理職も含め顧問で顧問会議などを持つなどして色々活動の方針とか方向性を議論していくということが必要です。個人に委ねていけば、どうしても色々な人がいますから、なかなか難しいと思います。

中塚　遅れてこられた竹中さん、品川の事例もちょっと紹介してもらえたら。

竹中　品川で、公立中学校のサッカー部の先生がいなくなってしまったということで、校長先生からお電話があって、外部指導員として今年から朝練だけお手伝いしています。地域で、東海道品川宿の街づくりというのをやってきているので、東海道品川宿 FC という地域のクラブを作ってフットサルを中心に活動しています。「学校対抗はサッカー部で、地域対抗はフットサルで」、そのようなことをうまくできないか、試行錯誤をしています。キャッチコピーは「スポーツ難民を救え」ということで、やりたくてもやる場所がないとか、バスケットやりながらサッカー、フットサルなど、やりたいことを併用できる選択肢を作っています。運動部活動といったときにまず公立中学校と公立高校で条件が少し違うということをすごく感じています。公立中学校では学力のバラつきや、家が近いから来ているという条件、公立高校は学力が同じグループになり、広域から集まっているっているというのが違いだと感じています。（中学のコミュニティのほうが、地域、生活と密接に結びついている。スポーツ以外のテーマコミュニティと連動しやすい。）後は先ほどの図にあった円の中でも、半分の先生は意義を見出して一生懸命やっていて、充実している先生とかもいっぱいいると感じています。ただそれが勝ちにこだわりすぎると暴言とか体罰とか事件になってしまう。一方で負担だと感じている先生は、それが長時間労働で自分自身が壊れてしまう。今、関わっている先生も親のプレッシャーとか受けたら壊れてしまうだろうと感じています。良さと課題が混在していて、一目見ただけでは分からいことが、部活動問題の難しさだと思います。さらに良い状態でも、必ず異動があるのでいい状態が保たれない、生徒側から見るといい先生にめぐり合えるのかは運に託されているということ。この状態をそれぞれの地域で運じゃなくて地域のクラブでなんとかしていきたいと活動しています。地域の先生たちは短期的には、とても頑張っている存在ですが、長期の部活動の在り方や、地域の中でのスポーツの文化などは、先生の立場からは語りにくい状況です。

嶋崎　ちなみに補足情報として、東京都の異動は今 6 年です。6 年経ったら次の学校。校長が、「この先生を残したい」と言えば 3 年間は残せるけれど、6 プラス 3 で 9 年。10 年残る人はいません。

竹中　品川区は小中一貫教育と義務教育学校というのを一生懸命やっていて、小学 1 年生から 9 年生という言い方をしています。サッカー部の生徒が増えているのは、4 種年代（小学生）が充実しているからだと思います。地域の少年サッカークラブやサッカースクールとして企業のサービスが行き届いているからです。小学生までは担い手が地域で、プロのコーチが教えてくれていたのに中学校に行ったら学校が担い手となり、ものすごいギャップがある。初めからそういうのを知らなければ不満もクレームも起きないかもしれません。4 種と 3 種にギャップがあって、それが「スポーツ難民」が生まれるひとつの原因になっている。種別や組織で、大人がつながっていないことが課題の原因だと考えています。おそらく、サッカーの部員が減っているのはジュニアユースのクラブが出来てきたという背景もあるのかなと。意欲的な子はもう地域のジュニアユースのクラブに流れているので、その中体連のクラブと大人同士も繋がっていないし、小学生と中体連を担う大人同士も繋がってないので子どもはもう行ってみないとわからない、親は初めての経験で、中 3 になって 6 月で負けたら、次の 4 月まで「あっ、スポーツをする機会ってないんだ」と、そこで気づくというのが、もう少し変えていきたいと思います。あと、「AI プロジェクト」＝「アマチュアに引退はない」というプロジェクトをこれから進めていきたいと考えています。

中西　たいへん貴重なご意見ありがとうございました。ということは言い換えると少なくとも都道府県レベルで幅広い複数の地域で好意的なコンセンサスを持っていないと、教員の異動によって関係の維持が出来なくなってしまうという危険性を持っているという理解でよろしいのですか。

守屋俊　先ほど学校がコンセプトを持っていないというお話があったんのですが、学校単位では無理だということです。異動があるので。校長先生も変わるのだから。市立なら市が、県立なら県が決めています。それから先ほど民間が参入してくるとおっしゃいましたけども、民間が参入すれば質は上がります。間違いなく。ただし、予算の裏付がないと参入してこないと思います。

参加者　人材のところでスポーツリーダーズバンクというのがあったのですが、それは各地域で管理がまかされていて、私は渋谷区の住人なのですが、渋谷区はですねスポーツリーダーズバンクに対する入り口がないんですよ。入り口がなくて、区役所に聞いてもわからないと。今度指導員が増えないという原因の一つに、各行政団体ごとに全然窓口がわからなくていうのがあると思うんですよね。僕、区役所直接行ってヒカリエに回されて、ヒカリエでも区役所に回されて、でもわからないから他のところに電話してくれって言われて、3 箇所くらい電話して、3 周くらいしたんでもうちょっと心折れちゃって。埼玉のスポーツリーダーズバンクで活動されているトレーナーさんとかがいて、そこは川越市なのですが、川越市は窓口があってそこに電話したら僕は一発でいけたからと言われて教えてもらったのですが。渋谷区はちょっと迷路みたいで。

中塚　多分行政の担当者も何年か経ったらどんどん部署も変わっていくから、わからなくなっていくんでしょうね

嶋崎　神奈川なんかはやっぱりスポーツセンターがあるので、そこでがっちりやっていますよね。調査したのですが、やり方はもう本当バラバラです。都道府県とか市区町村で、やり方とか全然バラバラなので、本当どうやってこれ人探しているんだろうというのはいっぱいあります。

参加者　入り込めない。もしニーズがあったとしても、そしたら入っていけるのかなって。

嶋崎　結局でも、使うほうも使っていないです。神奈川も、あんなにバンクもちゃんとしているのに、そこから人を引いてなくて、結局は校長が卒業生とか知り合いの人に頼む。神奈川県が調査したものがあるのですが、ちゃんと使われていないという実態がはっきりしています。

白井　やはりモデルケースとしてきちんと機能しているというのをきちんと見せないと動かないと思います。頭の中でいっぱい出来たとしても、だいたいみんなギルド組織のスポーツ選手は、スポーツに一生懸命な人は、それを仲間内で全部決めようとしますから。それはやはり問題ありです。どのように優秀な人材が外部指導者としてくるかどうか、私はかなり悲観的に見ています。あの待遇だったら片手間でしか出来ないですよね。本業は他にあってということで。これは少年野球の弊害と全く同じことを繰り返しそうな気もするのです。ただ、やはりここで変えないといけないかなと思います。

嶋崎　予算をつけてくれるなら、単純に教員の数を増やしてほしい。そうすればもっと色々なことが手厚くできる。そのほうがよっぽど現場の教員にとってはありがたい。体育の先生一人増やしてくれたほうが全然いいんじゃないという感じはしています。

白井　やはり学校にも外部の人の目が入らないと学校もよくならないと思うし、僕は、それは一概には言えない気がします。

守屋俊　全然違う父母会なんですけれども、人件費は増やせないけれども、委託費は増やせるんですよ。予算のつけ方として。やっぱりそれが一つの案です現実的に。資格を身につける形として。

白井　委託費だと何年かかるかという問題もあるから継続的な指導がなかなか難しいということがあると思います。

守屋俊　一方で、継続的な指導も 6 年、最長でも 9 年で異動がある。私の場合は図書館ですが、指定管理といいまして、官庁から民間に、うちの会社でやっているのですが 20 年とか 25 年とかいう期間で契約しています。そういうこともありえますので。

参加者　ちゃんとした指導者を雇うより、外部を取り入れたいという話があるじゃないですか。ですけど、ちゃんとした指導者を取り入れるのに、そこに対価を払わないというか、そこがそもそも教えてもらう子どもたちにしても、誰にしても対価を払わないというのがそもそも間違いなんじゃないかなと。格差社会で 1 回 500 円払うのはおかしいと言われてましたけど、払っているほうは、やりたいやつはやるし、家庭環境で出来ないというんだったらそこまでの資格がない、やれるところまで行

くしかないというふうにしないと。やはり指導する側も保証もされないし、給料的な保証も全然出てきていないし、そこは子どもたちは払えないとしても親たちがしっかり指導料として指導する先生とかに収めないと、こういう問題はちゃんと解決されていかないんじゃないかなって。やっぱりお金だと思うんですよ。

嶋崎　全くその通りです。まず私たちが考えているのは学校運動部活動というのはファーストタッチ、要は子どもたちがスポーツに触れるファーストタッチというわけですね。その部分については、私は無償であるべきだと思うし、それについては、我々現場の教員が十分担えるんです。そこまで加熱化していかなければ、週に 2、3 回学校で放課後に子どもたちと一緒にスポーツをすることは全然可能です。それが休みもなく、土日もなくなるから、問題になるのであって、ファーストタッチはそれでやってもらって、そこから先は今言ってもらったようにちゃんとやっぱり受益者負担でやっていくほうがいいと私も思います。その 500 円については、安いのでは。

参加者　そのファーストタッチを言うのであれば、体育の授業でいいんじゃないかなと。体育の授業を中学とかで見ていると、何だあれ軍隊じゃんと思うような授業しかやっていないように見えるんですよ。本当は先生たちと楽しくそこでいろんなスポーツをやってもいいと。まぁ保健の授業はしっかりやる。でも体育の授業はもっと楽しく、なんかもう校庭を何十週も走らされているような、なんか走りたくない子までみんな走っている、そんなのもうみんなスポーツ嫌いになる可能性も出てくるじゃないですか。その中で部活をどうのこうの言うよりも、もう部活やりたい子はしっかりお金を払ってでもやると。さっきの韓国の話じゃないですけど、エリートしか出来ないなら、だったら日本もそのくらい振り分けちゃっていいと思うんですよね。スポーツって大人になってやりたい人、スポーツクラブに行くのにみんなお金払うじゃないですか。だからそうやってちゃんと線引きをしてったほうが今後のために、そういうふうにしていいんじゃないかなと僕は思います。

中塚　おっしゃる通りで、それが今の日本の体育科教育の一番の問題点と言えるでしょう。今 10 年に一度の教育課程の見直し期で、すでに小中学校の学習指導要領は公示され、もうすぐ高校のものも出てきます。その議論に関わっている先生から聞いた話ですが、このまま油断していると体育の授業がなくなるよと。エビデンスをしっかり示していかないと。例えば国語や算数はこれだけ授業をやったらこんな成果が出てきましたと、目に見える形で示されている。じゃ一方で体育も今言われたような軍隊式だけのことやっていて、スポーツ嫌いをどんどん作っていくという、こんなんでいいのというような話です。だからそこは我々体育教師が性根据えてやっていかなければならないことで、部活問題とともに車の両輪ですよね。もう時間がそろそろなんですけど、千葉から藤原さんが来てくれているので、千葉県の状況を、あるいはサッカー界でも指導者養成からなにからいろいろ取り組んでいることがあって、藤原さんもリーダーシップとってやっておられます。そのあたりの状況をみなさんに紹介していただけないでしょうか。

藤原　今日は発言しないで聞いておこうと思っていたんですけど。やっぱり僕も異端児でいろんな勉強会や企画をしています。千葉大に授業に行ってもいつも学生が、藤原先生もう少し深く講義やってくださいというのがしょっちゅうなんで。そこでＡ＆Ｓリーグの鍋島村塾が誕生しました。

まず、日本にはスポーツが育っていない。スポーツはやっぱり遊びであり、楽しむことが本質にあります。何のためにやるかというスポーツに関する問題も、スポーツ基本法の問題も、さっき先生の言うとおり、全部手段になってしまっています。学校体育の中の手段としてスポーツを利用してきたので、この呪縛からどう覚醒していくか、これが課題だと思っています。やっぱり楽しいからやる。スポーツが楽しいから健康に留意する。その結果体力もついいてきます。という順番がどうしても逆転してしまって、ヨーロッパや南米のメキシコに行ったときに特にそれを感じました。本当にスポーツをやりたいからやる、という部分があまりにも薄い。だから先ほどの軍隊のようにみえると言われてましたね。でもそこはね、今一生懸命皆さんの声で変えようとしているし、体育が必要かどうかというのも僕ら検証していかないといけないと思っています。千葉もやっぱり閉鎖的なところがあって、なかなか変われない。外部指導者の件も、登録している人を使おうと思うんですけど、手続きも金銭的にも些少なので、保護者の組織を作って契約しています。教員はもうお金を集め管理しないこと。保護者が全部管理して、保護者が経営する。

リーグ戦文化の醸成にも取り組んでいるのですが、当初は本当に強いチームの監督の言うことしか通らなかったんですね。リーグ戦は補欠を無くしみんながレベルに応じてサッカーを楽しめることが大事でしょう。また、リーグ戦はサッカー協会主催なので、高体連の移籍 6 ヶ月規定はリーグ戦に適用しない。やっとそうなりました。

普及の大切さが少しずつ理解されてきて、グラスルーツ推進部もできて、一番大切なみんながスポーツを楽しむということにも目が向けられてきました。コーチャーズ・アソシエーションも 4 種の指導者中心に広げつつあります。今暁星の林先生を中心に、4 種の指導者をどう育てていくかの講習会担当をしながら、みんながスポーツを楽しむ指導、補欠を絶対作らないレベルに応じた文化、引退のない文化を創っていくことが大切と組織作りしています。受験勉強真最中でも、たまに対抗戦をやればいいんですよ。例えば県千葉とか渋幕とか月に一回ちょこちょこっと練習して、そういう対抗戦を作っていけばいいのであって。そうやって、また OB も組織を作って、繋がっていく、そして地域づくりに繋がる。

部活動も日本らしく学校を中心としたクラブを育てて行くことですね。幕総クラブは、隔週土曜日に地域の子供たちに解放して楽しんでいます。高校のなかに総合型スポーツクラブを作って、5 つくらいのクラブを一まとまりにして、入替もＯＫ。

部活動っておかしいですよね 100 人、200 人いるところもリーグ戦では 3 チームＯＫと補欠がいないように工夫しながらいろんなところでやり始めていますけど、まだまだですね。

鈴木大地さんも大学スポーツをアメリカ型にしようと頑張っているけれど、まだ上の人たちも勉強が足りないですよね。

まぁそんな感じで悪戦苦闘して出来ることだけやっています。だから僕のクラブも顧問一人しかいないけど、リーグ戦に 15 人ずつ 2 チーム参加してます。ルールも二人は常に入替していいというルール（伸びてきた選手は上のリーグ、上のリーグであまり出番のない選手は下のリーグに）を公式に作りながら、みんなが楽しんでいけるっていう制度を考え実行してます。

それから、必ず 2 回戦制にすることも大切ですよね。大負けしても次はどう戦うかと、すごく勉強になると思うし。各都県も中塚先生の DUO リーグを参考にしながら、よくなってきています。

まだまだ改善する余地はたくさんあるのが現状ですので、こういう事例をいっぱい出しながらみんなで前進して行きましょう。すみません。話があっちこっち飛んでしまって。今日は納得たくさんしました。ありがとうございます。

中塚　ありがとうございます。じゃ最後に嶋崎先生が締めていただいて。

嶋崎　本当に貴重な意見を頂戴しました。ありがとうございました。私は、自分が発信力を持ちたいと思ったから大学へ移りました。一高校の教員より、大学の肩書きを持つといろいろなところで話をさせていただく機会が増えました。微力ですが、少しでも力を使って変えていきたいなと思っています。本当にどうもありがとうございました。